

## はじめに

奄美大島、徳之島、沖縄島などからなる「中琉球」は、かつて1つの島を形成していました。そのため、奄美大島、徳之島、沖縄島北部（やんばる）の森林域には、シイ・カシ類を多く含む亜熱帯林が広がっています。シイ・カシ類の樹木は、秋にドングリの実をつけます。このドングリは、実をつけた樹木の次世代となるだけでなく、森の中に暮らす多くの生き物たちの食料になります。中琉球では、アマミトゲネズミ、トクノシマトゲネズミ、オキナワトゲネズミ、ケナガネズミ、リュウキュウイノシシといった哺乳類のほかに、ルリカケスやノグチゲラ、ヤンバルクイナといった鳥類、さらにはサワガニ類などがドングリを食べる生き物として知られています。

一方で、ドングリには、年によって豊作や凶作といった生産量の大きな変動があります。生き物たちにとって、豊作の年には豊富な食料が供給されることにはなりますが、凶作の年は十分な餌にありつけないことにもなります。そのため、森に多く生育するスダジイ（沖縄ではイタジイと呼ばれる）などのドングリの豊凶は、中琉球の生き物の行動や繁殖に影響を及ぼす大きな要因になると考えられています。

そこで私たちは、中琉球のドングリの生産量を広く継続的に把握することが、森林やそこに暮らす生き物達の保全のために重要であると考えました。このパンフレットでは、2015年から開始された継続調査（モニタリング）の手法や、これまでの結果、調査参加者の声などを紹介していきます。



春のやんばるの森

ドングリ調査の様子



※本調査は、(独)環境再生保全機構の環境研究総合推進費により実施しました。

JPMEERF20154003：奄美・琉球における森林地帯の絶滅危惧種・生物多様性保全に関する研究（平成27～29年度）

JPMEERF20184004：世界自然遺産のための沖縄・奄美における森林生態系管理手法の開発（平成30～令和3年度）

